学校便り　10月号

かけはし

学校 HP　　学校ブログ

薩摩川内市立里小学校　薩摩川内市里町里 1601　TEL 09969-3-2008
発　行　令和６年 10 月 10 日　　責任者　校長　永野 俊也

里周辺海水温
32 ℃(9/29)

いきものの お話　～ 動物愛護週間に寄せて～

校長　永野 俊也

去る９月 23 日(月)、１日順延となった里幼小中合同運動会が無事に開催されました。日曜日の早朝はまるで嵐の様相で、雷は鳴るし万国旗は吹き飛ぶしと大変な状況でしたが、水はけのよい中学校のグランドにも助けられ、翌日はちょうどよいコンディションで開催できました。子供たちも応援団を中心に練習の成果を思う存分発揮し、よき思い出の１ページを刻むことができたと思います。また、今年度は薩摩川内市誕生 20 周年の節目の年で、中学校の準会員の方々を中心に写真にある緑門を作っていただきました。植物の緑の持つ生命力みなぎる門は、運動会にエネルギーを送り彩を添えてくれました。本当にありがとうございました。

さて、今月は１日の全校朝会で子供たちに話した「いきものの話」から話題を広げてみたいと思います。全校朝会では数枚のイラストをもとに話をしました。最初は

昨年東の浜、村東体長 3m 弱、夏以降テトラ沿いで見かけた**オオメジロザメ**が今年も戻ってきました。東の浜の漁に出るたび、後半必ず姿を現わします。毎回同じサイズの個体なので、どうやら東の浜の湾内に住んで、ぐるぐる巡回しているようです。獰猛で危険度の高い↑ですが、今のところ悠然と姿を現しあいさつしに来る感じです。海の透視度が低いと、お互いバッタリ出くわしてパクっということがあるので海が濁っている時は漁に出ないよう気を付けています。そんな彼も準絶滅危惧種。水温が 26 ℃以下となり、南の海へ無事に帰ってくれればと思います。次にお話したのは

戦後某国のお話です。食料生産を上げようと稲作の害になる**スズメ**を徹底的に駆除してしまいました。その結果、食糧生産は増えるどころかスズメが食べてくれていた

イナゴの大量発生に見舞われ大凶作となり、1500 万～ 5500 万人が餓死したと言われています。その後、ソ連から 25 万羽のスズメを輸入し、生態系が戻っていくにしたがい、飢饉は収まっていったそうです。皮肉な話ですが、日本も他人事ではありません。戦後奄美や沖縄で猛毒を持つハブの天敵になると考え、人が連れ込んだ←**マングース**ですが、いざ島に放すと、爆発的に増え、ハブではなく国の特別天然記念物→**アマミノクロウサギ** を襲っていることがわかり、徹底的に駆除されることとなりました。今年の９月絶滅宣言が出されましたが、マングースにインタビューをすれば、「勝手に勘違いされて連れてこられたのに、都合が悪いと殺されるなんて割に合わない（怒）」と言いそうです…。

先月９月 20 ～ 26 日は**動物愛護週間**でしたのでこの話題を取り上げました。現在では、保健所が引き取る犬猫も減少傾向で、譲渡される割合も増えてはいますが、それでも年間４万匹近い数の犬猫が殺処分となっている現実があります。教頭時代の２校では、「学校周辺であればだれか拾ってくれるだろう」という安易な考えからか、合計６匹の猫を保護しました。３匹はうちと実家で引き取り、他の３匹は子供たちがもらってくれましたが、どの子たちも「今この人に助けてもらわないと、僕絶対死ぬ！」と必死にまとわりついてきたり、雨の中ボロボロになって泣いていたりという姿でした…。

人と動物との共生は、難しい問題もありますが、子供たちには動物たちの姿から命の大切さを感じ、明るい未来につなげていってもらえればと思っています。

頑張ったね!幼小中合同運動会

９月23日（月）は、里幼・小・中合同運動会が行われました。今年度は、雨天による順延となってしまいましたが、保護者・地域の方々の声援につつまれ、素晴らしい運動会となりました。

子供たちは、練習を繰り返す中で、中学生の動きから多くのことを学び、日々成長し、競技に、応援に、力強い姿を見せてくれました。子供たちが精一杯取り組む姿に、保護者の皆様方も感動されたのではないでしょうか。

今回の運動会を通して学んだことや感じたことを、今後の生活に生かしてほしいと思います。

運動会準備から当日まで､御協力ありがとうございました。

「かごしまの教育」県民週間

１１月１日（金）～７日（木）は､「かごしまの教育」県民週間です。
お時間のある方は、授業参観にお越しください。
なお、参観時間は、２～４校時
（９：２０～１２：００）です。

カンガルー授業

10月７日（火）「カンガルー授業」を行いました。助産師さんをお招きして、人の誕生について学びました。(5･6年)

11月行事

１日（金）「かごしまの教育」県民週間（～７日）
授業参観週間（～７日）
３日（日）文化の日
４日（月）振替休日
５日（火）避難訓練(津波)
読書旬間（～15日）
６日（水）委員会活動
７日（木）読書集会
８日（金）就学時検診
９日（土）土曜授業日
１１日（月）小中合同研修会（４時間授業）
１２日（火）中期ふるコミュ
１３日（水）クラブ活動
１４日（木）かのこゆり号来校
１９日（火）生活リズム週間（～25日）
２３日（土）勤労感謝の日
２６日（火）社会科見学宿泊学習（5･6年）
２７日（水）市陸上記録会（5･6年）
２８日（木）陸上記録会休養措置日（5･6年）

今月の付録
カズラタテ　と　南九州の十五夜行事

～　里の十五夜関連行事を探る　～　（最終回：前半）

戦後、 里の十五夜行事は、なぜ　カズラタテ　だけが残り現在の形で行われるようになっていったのか？　についての考察

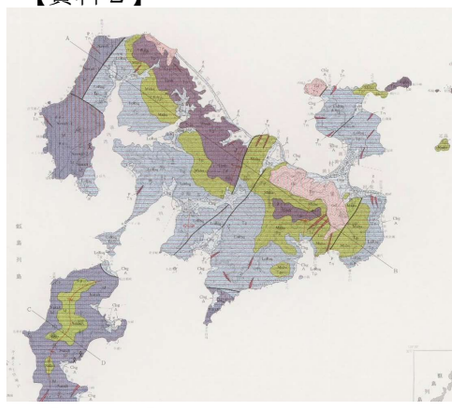
このシリーズもいよいよ今回が最終回となります。南九州の十五夜行事は、自然再生五穀豊穣を月に願うものと、郷中教育の子供から青年への通過儀礼の場という２つの意味を持ち、相撲と綱引を中心に、各地で行われていたものであるということ。そして里の十五夜行事も戦前までは同じように、カズラ綱を山から降ろし、相撲と綱引を行っていたということ。そしてメインとなる綱引の勝敗の目安として切ってつなげたカズラ綱のつなぎ目が立ってしまったら負けとなることから、里の一連の十五夜行事全体を **カズラタテ** と呼ぶようになったことなどを前回までにまとめました。

【資料１】

戦後、もともとの十五夜行事の意味合いが薄れていく中、相撲や綱引といった行事は各地で消えていきます。そして、里でも綱引はなくなり、十三夜に行われていた、５自治会それぞれの場所からカズラ綱の大蛇が里へ降り、集落を練り歩き、広場でとぐろを巻くという現在のカズラタテが独立して祭りとなっていきます。

それは、なぜ？　ということが今回のテーマですが、結論から言ってしまえば、それは、みんなが熱くなり、大人から子供まで楽しめるエンターテイメント性が１番あったからだと思うのです。それに里の場合、五穀豊穣や子供の通過儀礼としての場は、すぐ近い時期に八幡神社の秋の大祭があり、そちらにそれらの意味を重ね、カズラタテは１年に１度の祭りを村民みんなで楽しむようになったのではないかと思います。八幡神社で行われる **宮相撲** は、**内侍舞**や**直会** と同じように神様に奉納されるものですが、そればかりではなく**子供たちの成長を見ている人々すべてが祝福する場**です。そして最後に行われる、島立ちする中学３年男児と父親が取る**親子相撲**は、南九州の十五夜行事として脈々と受け継がれてきた、子供から大人への通過儀礼として息づいている里の伝統だと思うのです。そう考えると、とても感慨深いものがあります。（今時、まわしを締めて相撲ってちょっと恥ずかしい…と思う人も、こういったことを知ると力がわくかもしれませんね。）

【資料２】



これにて　　完　　では、？　なにか大事なことを見落としていると思いませんか？

南九州一円で同じ意味合いを持ち行われていた十五夜行事ですが、そこから派生して現在のカズラタテのような祭りとなった場所は、他の甑島の地域は元より南九州いや、日本全国見渡してもどこにも見当たりません。唯一無二。だから、奇祭などというキャッチコピーがついたりするのですが…。

カズラタテの起こりにしても、巷では、「薩摩藩時代材木にする森林生育の妨げになるので、カズラを取るよう命じられたことが起こり」とか、「神様に憑依された人がカズラを体に巻きつけて山から降りてきたことが起こり」とか、はたまた「西南戦争に従軍した里出身者が、偶然長崎の龍踊（ジャオドリ）を目にし里で広げたことが起こり」とか…　諸説耳にしましたが、南九州一連の十五夜行事との関連性まで視野を広げてみると、どれも後づけのように思えてしまいます。

民俗学という学問があります。特定地域の人々の営みで、伝承されてきた現象の歴史的な変遷を明らかにし、それを通じて現在の生活文化を説明しようとする学問です。「甑島は民俗学の宝庫」と聞いていましたが、その中でも里はなんと興味深い所だろうと、この夏初めて参加し、目にした「カズラタテ」から思いを巡らせてきました。民俗学では、歴史書を紐解くばかりでなく、口承を収集し、その土地の地形や地質、気候風土などからも情報を得て、総合的に答えを導き出していきます。その土地の人々の生活感や温度感から感じることも多く、話題の AI やチャット GPT がおそらく最も苦手とする学問の１つです。

「各地で行われていた南九州の十五夜行事に端を発しながら、なぜ里だけ『カズラタテ』という祭りに形を変えて現代に残ったのか」

【資料３】

ここ２カ月間、上の疑問をもんもんと考えていましたが、ようやく「こういうことであろう」という結論に達しました。もちろん専門家でない私の推論なので、「それは違う」というご指摘も当然あると思います。それはそれで、カズラタテをテーマにこれを機として議論が深まればいいのかな？　と思います。

なぜ？という疑問について、左の３枚の資料を使って次号で述べたいと思います。　【資料１】は、**昭和 30 年代の西の浜**の様子を写したもの。【資料２】は、国土地理院発行の**上甑島の地質図**。【資料３】は、今年 8 月 14 日西願寺で奉納された**さっこら踊り**です。今時、小学校や中学校の試験問題は、「次の資料を使って、自分の言葉で説明しなさい。」という問題が多くなっていますが、これなどまさに私に課された課題のようでした。そして、ヒントとなったのは次の２つ。

１　南九州全域で行われていた十五夜綱引で、カズラでできた綱を引くのは里だけであったこと　（小野重朗著「十五夜綱引の研究」より検証済）
２　甑島の他地域で雨ごいに関する地名や行事等の確認が、私が調べた範囲で確認できなかったこと

この２点から論を組み立て、資料１～３を使って論証を試みたいと思います。次号まで、よければみなさんも考えてみてくださいね。　（後半へ）

【「さっこら踊り」について】

詳細は、歌詞の全文を含め、里村郷土誌上巻に記載されています。歌詞の内容は、江石集落にまつわる心中物（思いの叶わぬ男女が互いに手を取って死出の道を選び、あの世で結ばれることを願うもの）です。初盆の家の慰霊のため、また雨ごいの踊りとして、牟礼山の権現様前、雨タモレの段、八幡神社前で踊られてきたといいます。その特徴は、農民の踊りとして、哀愁を帯びた歌とは対照的に、鎌などの刃物で切るような鋭い動作が見られます。「里村、あの日あの時」の**磯道義彦**（村東）さんの文章によれば、踊りを継承していく中で、踊りの所作を工夫したことが書かれており、大変興味深く感じました。

戦後長らく途切れていたものが、昭和 46 年に復活、昭和 56 年に保存会が結成され、昭和 57 年に「里村無形民俗文化財民俗芸能」に指定され、現在に至っています。来月下甑島で行われる竜宮フェスタでも踊られるそうです。里を代表する民俗芸能として、今後も末永く継承されることを願っています。